# 王希奇「一九四六」神戸展資料

## 感動の歴史絵画「一九四六」を語る

### ～胸に迫る縦 3m×横 20m の満洲引揚絵図～

2022 年8月 31 日～9 月 4 日

10:00～18:00（入場は 17:30 まで） ※最終日は 15:00 閉場

兵庫県立原田の森ギャラリー

日中国交回復50周年記念 「一九四六」神戸展

Beyond 50

日中敬隣

兵庫県立原田の森ギャラリー

2022.8.31－9.4

Love & Peace & Humanism

人類運命共同体

魯迅美術学院 王希奇教授

【「一九四六」展実行委員会代表・安斎育郎】

# 「一九四六」王希奇（魯迅美術学院教授）神戸展の開催に当たって

安斎育郎
平和のための博物館国際ネットワーク名誉ジェネラル・コーディネータ
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長

私はこのたび、王希奇先生の絵画の神戸展の実行委員会代表を務めさせて頂いている安斎育郎と申します。

日中国交回復か50周年に当たる2022年、兵庫県立原田の森ギャラリーで中国の王希奇画伯（魯迅美術学院教授）の大作『一九四六』神戸展を開催できたことは大きな喜びです。

この作品は、アジア太平洋戦争終結後に中国大陸から引き揚げる日本人の群像を描いた高さ 3 メートル、長さ 20 メートルの大作で、絵のタイトルにもなっている1946年に、105 万人を超える日本人が中国・遼寧省葫蘆（ころ）島から送還された歴史的事実を描いた作品です。中国で「葫蘆島日僑大遣返」と呼ばれているこの大事業は、連合国のポツダム宣言に伴う協議によって、中国国民政府が陸上輸送を、アメリカ政府が海上輸送を担当して取り組まれました。中国とアメリカが協力して日本人の大送還事業に取り組んだ事実は、現代の日本の若い人たちの間では広く知られておらず、国境を越えた人間愛をベースに描いた作家の心を多くの人々に伝えるために今回の神戸開催が計画されました。

2022年１月６日、私は実行委員会事務局長の宮原信哉さんともども、中国大使館在大阪総領事館を訪れ、薛剣大使級総領事らとお会いして協力を要請しました。総領事からは「文化事業を通した草の根の交流は極めて重要であり、今回の絵画展に中国大使館としても大阪総領事館としても協力したい」との積極的な申し出がありました。

幸い100人を超える方々が「特別サポーター」として本展示会を応援・支援して頂きました。加藤登紀子さんはこの展示会に向けて「果てなき大地の上に」を作詞・作曲して下さいました。また、孫崎享さん（外交評論家）と井口和起さん（京都府立大学元学長）はこのパンフレットに向けて特別寄稿して頂きました。実行委員会代表として、本パンフレットにも思いを綴った文章を寄せた事務局長の宮原信哉さんをはじめ、ご協力を頂いたすべての皆さんに心からの謝意を表明します。

安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム・終身名誉館長）

# 作品「一九四六」について

王　希奇（魯迅美術学院教授）

11年前に、偶然にも男装の少女が遺骨を抱いた写真をインタネットで見つけた。幼い子なのに、大人ぶった、困惑した表情に惹かれて、心を打たれた。調べてみると、1946年にあった日本人引き上げの史実に行き着いた。戦後生まれの私は祖母祖父から聞いた話を思い出した。

中国では日本人の引き上げのことを「大遣返」と呼ばれる、当時、故郷の錦州経由で葫芦島港へ乗船に向かう日本人引揚者で賑わっていたという。更に調べたところ、敗戦後、中国大陸残留日本人は280万人のうち、105万人ほど葫芦島港から引き上げたことが分かった。忘れかけたこの歴史事件について創作を始めようと決めた。

僕は歴史をテーマとした歴史画の創作が本業で数多くの歴史題材の絵を創作して知られている。この日本人引き上げの歴史を絵で残そうと思ったが、躊躇して矛盾した一時もあった。それを乗り越えてきた私は「一九四六」を構想して、創作し始めたのは 11 年前のことである。資料収集と現場考察から完成まで 5 年間半の歳月をかけた。最後にあの戦争で加害者と被害者という二つの境遇を一身に強いられる日本人の敗戦直後の引き上げの歴史事実を、縦 3m横20mの油絵「一九四六」およびそのシリーズの絵を創作した。

当初は縦 3m横20mの油絵にするつもりは全くなかった。描いているうちに引揚者の顔がどんどん増えて行列に入り込んできたのだ、描かずに居られなくて筆に走らせたままだった。僕はできれば頭に浮かんできた引揚者の顔を画面に収め、帰らせようという心情で描けるだけ描いた。

2017年9月28日、元日本文化庁長官の青柳正規先生が監修務めで、学校法人城西大学が主催した初回の「一九四六」展示会を東京美術倶楽部で開催された。翌年から舞鶴展、仙台展、高知展に続き、今回の神戸展を迎えた。これまでに多くの有識者、友人の皆様のご支援とご尽力の賜りだ。

作品「一九四六」シリーズは日本での展示会を通して多くの有識者と出会い、草の根の中日友好交流を深めた。そして来館者の皆様が書かれたコメントが一万件もあり、封じられていた記憶と出来事を語

ってくれた。書かれた内容が記載された公開したことより心を打たれたものも多くて今後の創作の源にしたいと考えている。

「一九四六」をご覧になる方には、人類文明史の視野から人間愛の眼差しで骨箱を抱えた男装少女、お乳を与えている母親、悲しげにトボトボと歩んでいく老人…と対話してもらいたい。そして、絵画技巧より、チラチラと、ほのぼのと光っているものに注目して欲しい、それは人間の命が自ら光るホタルのような光だ、生き抜く人間の意志の光なのだ、また帰路で亡くなられた故郷に戻りたい人々の魂の光だ。「一九四六」を通して戦争の愚かさと悲惨さ、平和の大切さと命の尊さを伝えようとした。そして僕の描いた人々は戦争を起こしたひとに弄ばれた日本人引揚者だが、境遇こそ違っても、この世の全ての戦争の犠牲者、被害者に重なる。

作品「一九四六」シリーズを見に来られた人には、歴史の重みを追体験して、絵の前に足を止め、人間性の輝き、命の掛け替えのなさ、平和の尊さ及び芸術の持つ力を感じ取り、歩きながら鑑賞していただきたい。

## 「一九四六」展に向けての毎日新聞紙上討論会
## 記事は８月12日に掲載されました

## 【特別サポーター】映画監督・山田洋次さんのメッセージ

満州で少年時代を過ごしていた僕は、日本人が支配者のように振舞っていたことをよく知っています。 だから中国人である王希奇さんという画家が、縦 3 メートル横 20 メートルの大作を描いて、あの悲惨な飢餓の中の引揚げを描き残すという大きな仕事をされたことに感動します。神戸展のご成功をお祈り致します。

# クラウド・ファンディング実施中

## リターン賞品はお値打ち品満載

クラウド・ファンディングのリターン賞品は、お値打ち品満載です!!

「神戸展特別サポーター」のご協力により、魅力的なリターン賞品をご用意しました。

人気絵本作家・長谷川義史様と中川ひろたか様連名のサイン付き 絵本、加藤登紀子様のサイン付き新曲 CD、安斎育郎博士のサイン付き新著、しりあがり寿様・安斎肇様の「とことん平和にこだわったオリジナル T シャツ&手ぬぐい」です。

下の「クラウド・ファンディング QR コード」からアクセス頂き、ご支援をお願いします。

**9 月 10 日まで**

# 【特別サポーター・加藤登紀子さんニューアルバム】

# 果てなき大地の上に

作詞・作曲:加藤登紀子

何のための戦争だったか　もう誰も答えない
どれほど人が傷ついたか　もう数えることができない
どれほど涙流したか　今はもう覚えていない
どれほど歩けばたどり着く　誰も答えてはくれない
今ここに生きている　たったひとつの光の中で
昨日までの微笑みを　もう一度思い出して
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !

明日を祈って眠った　命の欠片握りしめて
目覚めれば白い道を　ただひたすらに歩いた
走り回る子供らの　小さな手の温もりに
ほんの少しの幸せと　わずかな光を探した
懐かしい過去を捨てて　めぐり会える明日があれば
引き裂かれた心をつなぎ　太陽の下で踊ろう
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !
何千年も昔から　見えない力に怯えて
何のために誰のために　繰り返すのか戦争を

もう二度とこの罪を　犯さないと誓ったのに
何のために誰のために　繰り返すのか戦争を
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !
No War ! No ! Forever !　　No War ! Forever !

【JASRAC 許諾番号】JASRAC 出 2206488-201

【特別サポーター：孫崎享さん（外交問題評論家、元・外務省国際情報局長）】

# 寄稿　王希奇作「一九四六」で改めて戦争の悲惨を考えてみたい

孫崎享（まごさき・うける）

**1：戦争の悲惨**

王希奇の絵画を断片的に見た。描かれた群衆の中に多分私はいる。1943 年 7 月 19 日生まれの私は、まさに 1946 年コロ島から舞鶴に引き揚げた。母に聞けば小さなリュックを背負っていたという。私が幼少時についての確たる記憶は、船の上から見る海の波である。今日でも世界各地の避難民の姿を写真で見るが、コロ島からの日本人の引き揚げ者の悲惨さは群を抜いている。

第二次世界大戦で日本人が被った悲惨さは引き揚げ者だけではない。広島、長崎への原爆投下だけでなく、東京、大阪などの主要都市は焼け野原になった。

戦争被害をかえり見たい。

山川出版社の『詳説日本史』には次の記述がある。

「空襲での被害は家屋の全焼が約221万戸、死者約26万人に達し、主要な生産施設が破壊されました」「沖縄戦では日本軍の戦死者は5万5000名に達し、一般市民も10万人以上が戦没した」

更に『資料太平洋戦争被害調査報告』（中村隆英編東大出版）は次のように記述している。

「太平洋戦争における死者は厚生省の発表によると310万人余（内軍人軍属230万人、沖縄住民を含む在外邦人30万人、内地での戦災死亡者50万人）と考えられている。国富被害は総計約653億円」

「全国の直接的物的被害額約486億円（仮に日銀の卸物価価格数の倍率でみると最近地で10兆円―1995年―、繊維業は敗戦時の設備能力は昭和16年の20－40％、化学工業は35－60％に縮小した）

マーク・ゲインは 1902 年生まれ。1945 年 12 月から 1948 年 5 月まで日本に滞在し、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による間接的占領統治の内幕を記した『ニッポン日記』を離日後に刊行した。そこから引用する。

「（1945年）12月5日（着陸した厚木から）横浜に近づくにつれ損害の重大さがはっきりして来た。見渡す限り、一面の廃墟だった。石屑の山を掘り返して、新しく小舎を建てる空地を作ろうとしている者もあれば、煉瓦や木材を山と積んだ荷車を押したりしている者もいた。だが破壊の跡は余りにも広く、こうしたあらゆる努力も役立ちそうには見えなかった。鉄道の車両や機関車の骸骨がレールの上にそのまま放りっぱなしにされていた。電車も炎に捕らえられたその場所におかれたままで、炎は電線をバラバラに切断し、電柱を蠟細工でもあるかの様にヒン曲げていた。腸を抜かれた様なバスの車台や自動車が道端に転がっていた。ここはまさに人間がこしらえた砂漠だった。」

この当時の模様をロゲンドルフ・独神父は『和魂・洋魂』(講談社　1979 年)に次のように記述している。

「終戦直後の東京の廃墟ときたら、想像を絶していましたからね。

「(日本人の窮乏生活を見て、どんなことをお感じになりましたか)

「武士は食わねど高楊枝」の精神はこんな状態になってもまだ生きているということでした。食わないところは他人に見せないで、ひとり淋しく死んでいく。つまり、人にみられないように、丁寧に、飢え死にしてしまう。

(丁寧にですか)

きれいに死ぬんですよ。どれだけの人間が飢え死にしたり、栄養失調で死んだりしたかわからない。(こじきになるよりは)

プライドの問題ですよ。ひっそり死んでしまう。」

**2:平和の選択**

こうした状況を背景に、日本の多くの人は「二度と戦争をしない」という決意を行った。

その典型は日本国憲法第九条の戦争の放棄である。

九条を変えようとする人々は、戦争の放棄はマッカーサーの押し付けだというが、それは事実に反する。マッカーサー自身、幣原喜重郎の発案と米国での議会証言で述べている。

幣原平和財団『幣原喜重郎』(1955 年)は「1951 年 5 月 5 日の米議会上院軍事外交合同委員会公聴会での証言」によれば、マッカーサーは「幣原首相は『長い間熟慮して、この問題の唯一の解決は、戦争を無くすことだという確信にいたり、ためらいながら軍人のあなたに相談に来ました。なぜならあなたは私の提案を受け入れないと思うからです」『私はいま起草している憲法に、そういう条項を入れる努力をしたい』といった。私は思わず立ち上がり、この老人の両手を握って『最高に建設的な考えの一つだ』『世界はあなたを嘲笑するだろう。その考えを押し通すには大変な道徳的スタミナを要する。最終的には(嘲笑した)彼らは現状を守ることはできないだろうが』。私は彼を励まし、日本人はこの条項を憲法に書き入れた。」と記載している。

**3:日本の怖さ**

ロベール・ギランは 1908 年生まれ。1938 年訪日。戦前、戦中、戦後の日本を経験したほぼ唯一の外国人記者である。彼は『アジア特電』(毎日新聞社 1986 年)で次のように指摘した。

「歌舞伎にある回り舞台さながら、陰鬱ないくさの場面は突如引っ込められ、桜花爛漫の日本にとって代わった。武士のゆがんだ笑いのあとには日本的な微笑。新しい日本が前舞台に登場し、一見、昨日の日本とは連続性に欠けている。この変身は裏切りのかげもない。この国民は＜インスタント族＞であって＜振り子のように動く＞のだ。」

ロベール・ギランは「太平洋の島々で見知っていた虎の代わりにおとなしい羊」への急変について記述しているが、それは逆に羊から虎への変化の可能性を内蔵している。

私は 2016 年発行の『21 世紀の戦争と平和』で次を記載した。

『私はいま日本の行く末に危機感を持っています。このままいけば日本は民主主義国家、法治国家ではなくなります...

第二次世界大戦を経験してきた世代には「日本を再び戦争する国家にはしたくない」という強い思いがあります。その思いは、社会的立場、政治的立場を超えて共有されています。
たとえば、1930年生まれで、2015年12月に亡くなった野坂昭如さん。彼が亡くなる2日前の12月7日、TBSラジオが、彼の最後の手紙を伝えました。
“ぼくは、日本がひとつの瀬戸際にさしかかっているような気がしてならない。
明日は12月8日である。昭和16年のこの日、日本が真珠湾を攻撃した。8日の朝、米英と戦う宣戦布告の詔勅が出された。戦争が始まった日である。ハワイを攻撃することで、当時日本の行き詰まりを打破せんとした結果、戦争に突っ走った。
当面の安穏な生活が保障されるならばと、身を合わせているうちに、近頃、かなり物騒な世の中となってきた。戦後の日本は平和国家だというが、たった一日で平和国家に生まれ変わったのだから、同じく、たった一日で、その平和とやらを守るという名目で、軍事国家、つまり、戦争をする事にだってなりかねない。
気付いた時、二者択一など言っていられない。明日にでも、たったひとつの選択しか許されない世の中になってしまうのではないか。昭和16年の12月8日を知る人が、ごくわずかになった今、また、ヒョイとあの時代に戻ってしまいそうな気がしてならない。“。
堀文子さんという1918年生まれの画家がいます。自然の中にある命や花鳥を作品のモチーフとし、「花の画家」と呼ばれています。
2015 年10月11日、NHKで「堀文子『シリーズ、私の戦後 70 年―今、あの日々を思う』」が放映されました。
番組の序盤では「どんな雑草でも、自分の力で死ぬまで生きている。それを見ることが、今の私の刺激です。自然は誰の力も借りず、自分の出番を間違えずに、ちゃんと、咲きます」と、まさに彼女の絵から受ける印象と同じトーンで話されていました。
それが番組後半になるとトーンが変わりました。
“（今の日本も、第二次大戦当時と同様に）非常に危険な状態にありますが、いまなら、国民が競って反対すればいいんだから。
日本が危険な瀬戸際にいるように見えます。国家権力に反抗するには、相当な勇気と智慧がいります。下手をすると牢獄に繋がれる。何をするか、わかりませんよ、国家が野心を持つと。
物事が崩れはじめると、ガラガラと崩れちゃいます。ですから、崩れる前に、騒がないといけない。日本、何するかわからないです。いま、戦争の記憶を忘れてしまって、いまの政府が、もう一度、勢いのある日本を取り戻したくなっている気がして。非常に危険だと思っています。どんなに軽蔑されても、人の命で、戦ってはいけません。“』
残念です。

**4：憲法改正に向かう日本**

日本は残念ながら、今野坂昭如氏や堀文子さんが危惧した危険な状況に進んでいる。
戦争というのが合理的阪大という空気が広がっている。
私は本年６月『平和を創る道の探求』を刊行したが、そこで日ロ戦争についてのトルストイと夏目漱石を引用した。

トルストイは 1904 年 2 月 8 日日露戦争が開始された後、同年6月27日、英国ロンドンタイムス紙に「日露戦争論」を発表した。

「戦争（日露戦争）はまたも起こってしまった。誰にも無用で無益な困難が再来し、偽り、欺きが横行し、そして人類の愚かさ、残忍さを露呈した。東西を隔てた人々を見るといい。一方は一切の殺生を禁ずる仏教徒で、一方は、世界中は兄弟であり、愛を大切にするキリスト教徒である。

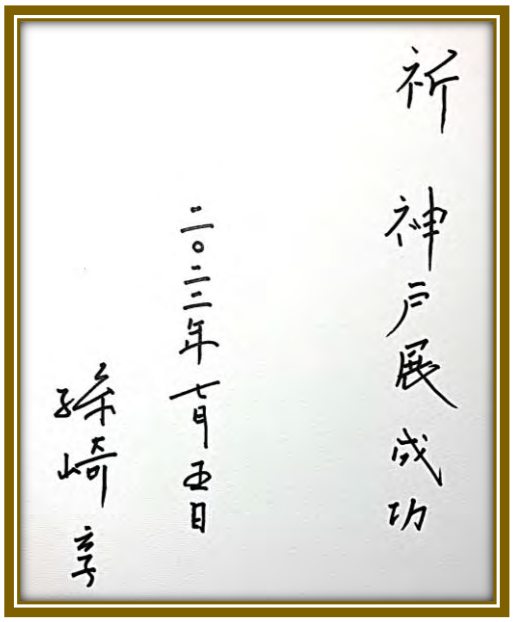
知識人が先頭に立って人々を誘導している。知識人は戦争の危険を冒さずに他人を扇動することのみに努め、不幸で愚かな兄弟、同胞を戦場に送り込んでいるのだ」

夏目漱石は日露戦争について、短編『趣味の遺伝』（1906年）の中で、「陽気のせいで神も気違いになる。“人を屠りて餓えたる犬を救え”と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満洲の果まで響き渡った時、日人と露人ははっと応えて百里に余る一大屠場を朔北の野やに開いた』と書いた。「神も気違いになる」と表現している。

知識人はあたかも戦争を気高き行為のように言うが、「神も気違いになる」行為なのだ。

王希奇作「一九四六」を見て、改めて戦争の悲惨さを考えてみたい。

## 特別サポーター孫崎享さんの話題の最近著



ウクライナ危機は新たな冷戦の序曲か

ウクライナ危機の本質に迫り、和解の道を探る。そこから新世界秩序を展望し、台湾、尖閣、北朝鮮など、日本の平和への道筋を示す。

【特別サポーター：井口和起さん】

# 王希奇画伯の大作「1946」と歴史認識

京都府立京都学歴彩館顧問・京都府立大学元学長・福知山公立大学名誉学長
京都大学博士（文学） 井 口 和 起

**●王希奇画伯との出逢い**

畏友王希奇画伯（魯迅美術学院教授）と歓談したのはちょうど 10 年前のことだったと思う。

奥方の王秋菊さん（中国東北大学教授）は日本文化の研究者だったから、私は 25 年余も前から存じ上げていた。その秋菊さんが通訳もかねて希奇さんの取材活動で舞鶴引揚記念館に来られたのが 2012 年の 4 月だった。日本近現代史の研究者で地元京都府の出身でもあった私はこれに同行し、大作にかける希奇さんの熱意と思索に深く感じ入った。

希奇さんは、今回の展覧会への「あいさつ」文「『一九四六』神戸展に寄せて」のなかで「11 年前に偶然にも、『遺骨を抱いた男装の少女』の写真に惹かれ、『一九四六』を構想し創作し始めました」と書いている。2012 年の 2 月 10 日に創作に着手したとのことで、舞鶴訪問時はちょうど構想から創作へと進んだばかりの頃だった。構想段階の小さな下絵のコピー（といっても、縦 20 ㎝・横 140 ㎝を超える）を持参されており、私はそれを拝見しつつ秋菊さんの通訳を交えて語り合った。

この頃、私は秋菊さんのはからいで瀋陽の東北大学兼職教授として年2回、3月と9月に同大学の日本語・日本文化専攻の大学院生たちへの集中講義に出かけていた。同行した妻・和子も含めて王夫妻一家と私どもは家族ぐるみの付き合いとなり、訪中の都度、制作中の作品を拝見し、話を聴いた。分野は異なるのだが書家である妻と画家希奇さんとは、言葉では無理だがどこか通じ合うのか互いに筆を執って楽しそうに時を過ごすこともあった。

そんななかで、2015 年 3 月、王さんご夫妻の案内で私たち夫婦は葫蘆島を訪ねた。私は 1980 年代の前半に訪れたこともあったのだが、その時とはずいぶん岬の様子は変わり、軍の施設となっていたので、岬までは行けなかった。再訪の時のことにふれて「1946」展開催にあたって私は以前にこんなことを書き記した。

希奇さんが「日本僑俘遣返之地」碑の立つ小高い丘から引揚船が出港した岬を遠望しながら私に尋

ねた。「井口さん、子どもの泣き声が聴こえてきませんか」私が黙っていると、彼は続けてこう言った。「僕にはいつも聴こえてくるのですよ。私には言葉が出てこなかった」希奇さんにはこの作品の中に描かれた「泣く力さえ失って母親の腕の中で息をひきとった幼子の魂の泣き声が聴こえてくるのだろう。戦争という人類最悪最大の愚行を決して繰り返してはならないという希奇さん自身の声がその声に重なる。この絵に向かい私はどんな言葉を語ればよいのか。私はこれからも考え続けるだろう」と。

以下に、この時出てこなかった言葉にかえて、歴史研究者としての私の現在の思いを記しておく。希奇さんの問いへの今後も探し続ける応答の中間報告と思っていただければ幸いである。

**●制作者のねらいと技法を知り作品から学ぶ**

希奇さんは展覧会用に製作した「『1946』制作・展覧会ビデオ」で、鑑賞方法と制作技法についてこう語っている。

①幾度も画面の再構築を繰り返した5年半に及ぶ制作過程は、同時に自分が引揚を体験しているかのような苦悩の過程だった。②この作品の鑑賞方法として自分は「移動式」という方式を採った。絵の左側から右側へと歩きながら見てほしい。そのために、「長幅式」という中国壁画の方式をとり、高さ3m、幅 20mの作品にした。これは、見る人がこの歴史画の画面に入り込み、人々とともに歩みながら移動することで、画面から多くの情報を読み取ってくれることを願ってのことである。そうすることで作品の全体像が把握できると思う。③色彩・見る人のリズム・光などに配慮した。とりわけ、通常の方法とは異なり科学的な光の関係ではなく「ホタル」式の手法を用いた。個々の人物自身が放つ光を通じて人々が生き残ろうとして現れている生命の強さを表現したのだ。④「一センテンス、一段落をじっくり読み取ろう」と「読み返す」小説に対する向き合い方と同じように、この絵も何度も「読み返し」てほしい。それによって作品全体から何かを感じ取っていただきたい。⑤作品の良し悪しではなく、「感動」していただけることを期待している。

希奇さんはこのビデオの冒頭で、自分が歴史画を制作するのはなぜかについて「人々がどのように生きたか。自分の視覚を延ばすにはこれまでのことを掘り起こさなければならないと思う」とも述べている。

彼の言にしたがって私は幾度もこの作品を鑑賞してきた。描かれている人々の数は到底数え切れない。それぞれの人がこの場にたどり着くまでの旧「満州」（中国東北地域。以下、本文では満州と表記することを許されたい）での生活、1945 年 8 月 9 日のソ連軍の満州侵攻（日ソ戦争開始）後の「逃避行」の苦難と日本への帰還を直前にした「思い」等など、それぞれはあまりにも多様で、それに何かを応えることは到底できない。私は持てるだけの「想像力」を働かせて観て歩くのだが、そのたびに新しい発見と疑問とにぶつかる。

中で私が最も気になっているのは、希奇さんが最初に惹かれた「遺骨を抱いた男装の少女」ではなく、この絵の4枚目の右端近くに描かれている少女像の表情である。自分の背中よりも大きな児を負んぶしてじっと見つめている少女の像である。これは飯山達雄写真・文『小さな引揚者』（草土文化出版、

1985）のカバー表紙の写真をもとに描かれているのだが、その「まなざし」には大きな違いがある。飯山の写真の方はカメラに向かってじっと見つめている「少女のまなざし」だが、この作品の彼女の「まなざし」はたいそう鋭く、憤りを込めて何かを睨みつけているような「まなざし」ではないか。「私はどうしてこんな目に遭わねばならなかったの？これからどうしたらいいの？教えてよ！」と私に詰め寄ってくる。このことを希奇さんに尋ねたところ、彼は意図的にこのような「まなざし」に描いたのだとの答えが返ってきた。希奇さんからの問いかけが次々と積もり重なるばかりである。

**●尋ねても語らない体験者たち**

描かれている人びとの圧倒的多数は女性たちと少年少女たちである。幼児を背にしたり乳呑み児を抱きかかえた母子像が多い。青壮年の男たちも無いではないが、表情まで描かれているのは数少ない。葫蘆島からの引揚者の多くが満州北部の都市や農村部にいた一般民衆であったからである。とりわけ苦難を強いられたのは満州開拓団の一員だった人たちであったろう。

鋭い「まなざし」で問い詰めてくる少女をその一員だったと仮定して勝手にA子と名付けて、私がA子のなりかわって考えてみることにする。私には満州体験は無いのだが、敗戦の翌年に最後の「国民学校」一年生になった世代で、A子の少し年下だが空襲と防空壕への避難などわずかだが戦時体験はあり、年上の姉たちもいたから同世代的な感覚もある。また、歴史研究者として開拓団体験者からの聴き取りや北満の現地訪問に加わったこともあるので、なんとかA子の代役を演じることが出来るのではないかと思ってのことである。以下の私はA子である

私は帰国後ようやく少し落ち着き始めた頃、周りの大人たち、とりわけ肉親（といっても両親は亡くなっていたから、親類縁者たちだが）や開拓団体験者たちにさまざまに問いかけた。だが、あまり話してくれる人はなかった。どうしてだろう。

私は成人するにつれて、体験者たちの多くがその体験について率直に語ることが少ない理由が少しわかりかけてきた。その原因は希奇さんが「あいさつ」文にいう「あの戦争で、加害者と被害者という異なる二つの境遇を、一身に強いられた日本人」だったからだろうと。

結果的に、自分たちが植民者として中国民衆への加害者だったことはわかる。私がいた開拓村もその実態は現地の中国人農民たちの農地を奪って建設されたものだったのだろう。少なくともすべてを新たに自分たちが開墾したとばかりは言えない土地だったろう。

他方、自分たちは最後にはこれほど大きな被害と苦難に遭遇したのだから、当時の「国策の犠牲者」だったという思いもある。だが、そう考えることに躊躇いもある。満州への移民は「公募」のかたちをとっていた。それがほとんど「強制」に近いかたちで行われたとしても、表面上は自分の意志（子供であった私の場合は、親たちの意志）で公募に応じたのである。個人の意志で拒否できない徴兵制の「兵役」とは異なるから、一方的に犠牲者だとだけは言い切れない躊躇いが生じる。事実、語り継ぎを始めた知り合いの体験者たちと、徴兵されて戦場で捕虜となりシベリア抑留から帰還した体験者たちの「語り部」との間には、同じ戦争体験の「語り部」とはいえ深い溝があったと私は聴いた。「我々はあの赤紙一枚（召

集令状）で戦場に駆り出され、シベリアでの過酷な抑留生活を強いられた。だがお前たちは国から補助金までもらって自分たちの意志で満州まで行って災難に遭っただけではないか」と深くて暗い心の溝をつくられたというのだ。

また、開拓団の場合は、「国策」として国家が進めたとはいえ、地方機関（都道府県や市町村）に一定の裁量権があった。積極的に推進するかしないか、地方行政組織がその「裁量と責任」で判断し、政策を実行した。開拓移民に参加するよう強要したという地方機関の役人たちの責任も問われる。さらに、貧しかった小作農の私の親たちは、村の全体の解放を願って、「満州分村移民」になったのだ。だから、移民によって得た土地は、日本の「郷里」のいわば海外の「飛び地」のようなものと思って、懸命に働いたのだ。こうして国だけではなく、地方の村や個人までもが満州を自分たちに豊かな実りをもたらしてくれる広大な土地として魅せられ、こだわり、満州を手放せなくなったと思われる。

こうして、日本人同士であっても、加害と被害の立場がさまざまに複雑に交錯していた。しかも、戦時中に満州行きを熱心に勧めた担当職員が、戦後は引揚者の支援業務を担当した。帰り着いた郷里の村は、家族を失った満州開拓団の生存者・私たちと、私たちを送り出した人たちが軒を並べて住む村社会だった。開拓団に加わった家族内でさえ、満州行きを決めた父親と、反対した母親と子どもがいたことなど、こうした諸事情から体験者たちは満州体験を語らず口を閉ざした。口を閉ざすことが、戦後の地域社会の維持につながり家族の崩壊を防いできたということだろう。

京都市や府内の開拓団体験者たちの聴き取りを精力的に行い、『裂かれた大地　京都満州開拓団　記録なき歴史』（京都新聞出版センター、2005）や『移民たちの「満州」―満蒙開拓団の虚と実』（平凡社新書、2015）にまとめた新聞記者・二松啓紀はその著書のなかで上のような事情をまとめている。

**●「満州開拓団顕彰碑」の世界**

その一方で、開拓団の多く送り出した村々では、戦後、数多くの「顕彰碑」が建てられている。私の村にも顕彰碑があるのだが、そこにも私の問いへの答えは見いだせない。

坂部晶子『「満州」経験の社会学―植民地の記憶のかたち―』（世界思想社、2008）は、長野県の開拓団を送り出した村々の「満州開拓団」の「慰霊（顕彰）碑」の碑文を検討して次のように整理している。

碑文はたいてい3つの部分で構成されている。第一が開拓団の入植経緯の説明、第二が経験した逃避行の悲劇の記述、第三が開拓記念と犠牲者への追悼・平和祈念の記述、である。

入植の経緯では、「当時の国策」と関連づけて説明したものが圧倒的に多い。そこでは、「満州国」と「日本政府」とが一体となって共に「王道楽土」建設に邁進するという当時日本国内で喧伝された言葉にそって、入植経緯が記されている。第二は碑文の中心となっている部分である。ここには満州での開拓団生活がソ連軍の侵攻という「予想もしなかった突然の出来事」によって破壊され、私たち開拓団員は戦火に巻き込まれ、悲惨きわまる逃避行となったことが記されている。犠牲者たちの惨状を伝え、弔うことが、碑文全体の中心である。第三の部分はこのような悲惨なことを繰り返さないためにも、ここに碑を建て、後世永遠の平和を祈るものであるという締めくくりの文章となる。

多くの碑文には当時の国策そのものへの批判的表現や反省の視点からの記述はほとんどない。記念碑建設の時期は戦後すぐから 1990 年代にいたるまで各年代にわたっているが、それぞれの年代による碑文の違いはあまりない。

このように戦後に建立された多くの記念碑は「世界平和」を謳ったものが多いのだが、戦前部分では理想郷実現への献身的な努力を顕彰し、戦後部分でははは世界平和を願う象徴とする。そして間をつなぐのが、敗戦時の「逃避行」という開拓団の悲劇的最期という図式になっている。しかし、これだけでは、どうしてこんなことになったのか、なぜ多くの人びとが死なねばならず、かろうじて生き残って帰国した私だが、どうしてこれほどまでの悲惨な体験をしなければならなかったのかの全体的な原因を説明してくれはしない。つまり、歴史認識にはならないのだと、別の論者は私に教えてくれている。

しかし、このように遺された碑は、各開拓団、各村の「満州開拓事業」の一種の「公的」な記念碑と考えられている。個人の体験記や語りとは異なり、村・郷土という特定の地域や集団内で共有される「公的」な「語り」である。そのため、碑文の文意など多くの団員が理解し、首肯したものとは到底考えられないのだが、「顕彰碑」が「公的事業」として建てられることに感謝し、内容については「語らず、口を閉ざしている」ことが、意識的・無意識的を問わず、この地域の「戦後社会」に適応する彼ら（私ら）の身の処し方であったのかも知れない。

成人となり、中年を迎えた頃、私はさらに体験者の手記や自伝小説などを読んでいった。

満州の気象台の職員だった夫（戦後、著名な作家となった新田次郎）と離れて、子どもをつれて満州国の首都・新京（現・長春）から北朝鮮のソ連軍の占領地域に入り、決死の覚悟で 38 度線を越えて南朝鮮にたどりつき、そこから日本に引き揚げた筆者・藤原ていの『流れる星は生きている』（初版 1949）や彼女の自伝とも言える『旅路』（1981）などをはじめ、数え切れないほどの手記や自伝小説などを読みあさった。また、丸山邦雄『なぜコロ島を開いたか―在満邦人の引揚げ秘録』（永田書房、1970）やさらに 2018 年 3 月に NHK テレビで放映された特集ドラマ「どこにもない国」を視聴し、その原案となったポール・邦昭・マルヤマ著:高作自子訳『満州 奇跡の脱出 170 万同胞を救うべく立ち上がった 3 人の男たち』（星雲社、2011）なども年老いてから手にしてみた。

そこから、私の体験と比べ北朝鮮からの引揚がどれほどの艱難を強いられたかを知るとともに、戦後の日本人の海外からの引揚体験は、その一人ひとりの数ほど多様で、その個人の体験は自分も含めて誰のものであれ、どんな内容であったとしてもその人にとっては「絶対的な意味」を持っている。そのこと自体は尊重されねばならないから、自分の体験からは疑問に思えることも理解し得る想像力を互いに持たねばならないことを私は自覚した。だが、なぜ、こんな目に遭わねばならなかったのかは依然として曖昧模糊としている。

仕方がないから、すこし厄介だが関連分野の歴史家たちの著書に挑戦してみた。

**●「満州国」と満蒙開拓についての歴史研究**

日本の関東軍は武力による満州制圧を企てて 1931 年 9 月 18 日南満州鉄道の奉天近郊の線路を

自ら爆破して柳条湖事件を引き起こし、これをきっかけに中国軍を攻撃して「満州事変」（中国では九・一八事変）と呼ばれる戦争を始めた。時の政府は事変の不拡大を内外に声明したが、関東軍はこれを無視して軍事行動を拡大し、ほぼ半年ほどで満州の主要地域を占領し、1932 年 3 月、清朝最後の皇帝だった溥儀を執政（のちに皇帝）にむかえて満州国の建国を宣言した。しかし、軍事・外交ばかりか内政の実権も関東軍や日本人官吏がにぎっていたから、満州国は日本の傀儡国家であり、満州地域は日本の植民地的支配下に置かれた。

このような 1930 年代から 1945 年夏の敗戦までの満州国の基本的性格とこの地域に対する日本の植民地主義的支配という事実は、現代日本の歴史教科書ではほぼ共通の定説的記述となっている。

この「満州国」へ日本の「国策」として送り込まれた「満蒙開拓団」（「満州開拓団」を含む）が、日本による侵略と植民地的支配を目指す「国策」に他ならなかったことも明らかにされ、定説となっているようだ。

加藤聖文『満蒙開拓団―虚妄の「日満一体」』（岩波書店、2017）は、この国策は 1930 年の恐慌や「満州事変」後の高まる移民熱から始まり、「満州移民計画の浮上」に続く「試験移民」、そして「百万戸移民計画と本格移民実施」、「経済更生運動と分村計画の結合」へと進み、日中戦争から太平洋戦争へと戦争の拡大に伴って生じた「戦局の悪化と破綻する国策」、最後に開拓団の壊滅と逃避行、そして開拓団員たちが日本へ帰国後も「故郷」への帰郷がかなわず、日本国内で新たに第二の「開拓村」の建設とそこへの居住を余儀なくされた場合があることも明らかにしている。私は「開拓団」の全貌を知った。

厄介なのは、この事業が実質は関東軍の主導で遂行されていくのだが、形式的には「満州国」（傀儡政府であったとして、見せかけは独立国）と「日本」との「共同」というかたちをとっていることにある。日本政府の開拓促進事業に必要な組織・制度づくりに並んで、「満州国」政府による「満州国」での組織・制度づくりも行われる。この「満州国」政府の組織と制度に従って現地住民への施策も遂行される。そのため、自分たち移民の「開拓村」建設が現地中国の農民たちから「土地を奪っている」という事実を直観しにくい状況が生まれる。開拓団員たちには「満州国」行政機関によって現地住民の「移動」は適切に行われたと認識され、自分たちの行動と直結していることを意識しにくい構造が作り出されていたとことを私は学んだ。

**●日ソ戦争と民衆の逃避行について**

これについて私は、島田俊彦『関東軍 在満陸軍の独走』（中公新書、1965）や後藤蔵人『満州―修羅の群（満蒙開拓団難民の記録）』（太平出版、初版 1973）をかなり以前に読んだことを覚えているが、最近になって富田武『日ソ戦争 1945 年 8 月―棄てられた兵士と居留民―』（みすず書房、2020）がずいぶんと詳しく新しいことを教えてくれていることを知った。

ソ連の対日戦争の戦略は、ドイツ降伏後3ヵ月以内に対日戦争に参加し、ヤルタ協定「密約」の領土・利権を確保するとともに、ポツダム会談とアメリカの原爆実験成功によってアメリカ主導の戦勝と講和の狙いを阻止し、戦後の日本に対する発言権を確保し、極東における大国としての地歩を固めることに

あった。この政治目的＝政略に従って、短期間で満州・南樺太・千島の大部分を占領し、関東軍を捕虜として本土移動を許さず、アメリカによる広島への原爆投下を睨みながら日本を「ポツダム宣言」受諾に追い込む、文字どおりの電撃的な戦争を行う戦略に他ならなかったとまとめている。

このソ連の対日戦争戦略を当時の日本政府や軍部がまったく予想しなかった訳では決してない。

1945 年 4 月 5 日に日本政府はソ連から日ソ中立条約の不延長通告を受けた。続く 5 月 9 日には同盟国ドイツが降伏し、ソ連軍部隊のヨーロッパから極東への移動情報が伝えられる中で、5 月 30 日に大本営は関東軍総司令官に北朝鮮に配置された部隊をも指揮し「満鮮方面対ソ防衛作戦計画」を遂行するよう命令した。それは満州の地域の広さを利用してソ連の野戦軍を「撃破」するとともに、「南満」と「朝鮮」の「要域」を確保して「持久戦」に持ち込めというものである。これは太平洋戦争全域での敗北に次ぐ敗北のなかで、関東軍はこれまで以上に多数の部隊を南方と日本本土に回さざるを得なくなっていたから、すでにこの年の 1 月に計画されていた北部満州地域を放棄して南満州地域まで防衛戦を後退させる基本戦略であった。

この作戦変更によってソ連と満州国の国境要塞地帯からの兵員や武器弾薬を引き揚げて守備隊を見殺しにしたばかりか、「肉薄攻撃」（対戦車特攻。黄色火薬を詰めた蜜柑箱程度の箱を抱いて、敵戦車のキャタピラの下に飛び込む死を覚悟した最後の攻撃法）さえ行わせた。作戦変更で前線を後退させることを知られては、ソ連が戦争をしかけてくるのを「挑発する」として、満州北部にいた開拓団員たちには知らせず、開戦直前でさえ「関東軍がついているから生業に励め」と放送し、そのうえ都市部に避難してきた人々の列車輸送を後回しにしてソ連軍の攻撃に晒した。このように関東軍とその全体を指揮した日本軍部は兵士と民衆を見捨て、大日本帝国は日本人を「棄民」したのだ。

ソ連軍のこの戦争で「蛮行」についてはどうか。

ヨーロッパ戦線の独ソ戦前半にソ連はドイツ軍によって国土を廃墟とされ、ユダヤ人、ロシア人らが大量に虐殺された。そのため、ソ連軍がドイツに侵攻すると「ファシズム打倒」よりも「ドイツ人を殺せ」という復讐心が表面化した。彼らはドイツ東部などで復讐の蛮行を行った。それが、女性に対するレイプや住民の所持品強奪などとして対日戦でも再現された。そのうえで、①関東軍が行った「決死隊」（前述の肉薄攻撃）の抵抗を過大評価して、極度に警戒し、8 月 19 日武装解除後も掃討に全力を傾けた。日本軍の「玉砕」に恐怖心を煽られ、サムライ、カミカゼが当時のソ連兵の日本人観に大きな影響を与えていた。②兵要地誌の情報が不足し、戦場としては初体験の満州での作戦には威力偵察以上の前哨戦が必要で、「先遣機動部隊」の猛攻が行われた。新兵として補充された戦場が初めての若者が、恐怖心から精神的に荒れてきたことも蛮行の原因の一つであるかもしれない。③開拓団側が「匪賊」対策の必要から、団長の多くが在郷軍人だったこともあって、小銃、手榴弾などで武装していたことが、ソ連軍には「民間人」には見えず、「敵軍の残党」と判断されたことも要因である。兵士たちが非戦闘員の殺害を禁じた国際法的な常識を身につけていなかったことも要因だった等々、いろいろ教えられた。

ただ、「ソ連軍囚人兵について」いえば、ソ連軍はドイツの侵攻直後から囚人の多数を釈放して兵役につけ、たが、その圧倒的多数は軽微な経済犯であり、政治犯や累犯刑事犯は恩赦の対象ではなかった。

だから、「刺青をした凶悪犯」という回想記（噂を聞いて）でイメージされた囚人はソ連軍にはほとんど含まれていなかったことも指摘されている。

これらのことを私はこの本の拾い読みから学んだのだが、恐ろしい疑問も浮かんできた。

もし、関東軍が総力を挙げて対ソ戦争を満州の地で展開していたなら、私たちはどうなっていたのだろうか。あの沖縄での日米戦のように満州の国境地帯にいた私たちは軍民共に多大の犠牲者となってしまっていたのではないだろうか。関東軍が私たちを「置き去りにした」「棄民」したことに私は怒りを覚えずにはいられないのだが、置き去りにせずに戦っていたとしても、・・・・・・？と無残な想像をせざるを得ない。やはり、戦争はどんなにしても私たちに無残な悲劇をもたらすだけだと重ねて思う。

**●「引揚げ」の歴史研究ではどうか**

これも最近の著作だが、加藤聖文『海外引揚の研究―忘却された「大日本帝国」』（岩波書店、2020）が満州だけでなく、アジア・太平洋地域に広がっていた日本の植民地や占領地域の日本の民間人の引揚の全体像を私に学ばせてくれた。

ここでは、満州からの引揚の実施過程について私が学んだことだけを紹介しておく。

満州からの民間人の引揚は、①この地域がソ連軍に占領されていたこと、②中国国内の国共内戦状態にあったことと関連して、米軍は当初「国共対立」に「巻き込まれることを嫌」って「共産党支配地域への展開を回避した」こと、③8 月 14 日の「中ソ友好同盟条約」締結時にソ連の撤兵期日が当初 12 月 3 日とされていたこと、④これを前提に蒋介石は 10 月下旬から国府軍を大連・安東・営口・葫蘆島に上陸させ、東北全土への即時進駐を要求していたが、ソ連がこれを拒否し、交渉は暗礁に乗り上げていたこと、⑤日本人技術者の留用をめぐり、米中間に摩擦が生じていたこと、等によって当初、事態は進展していなかった。

しかし、11 月に入って事態が急展開する。その要因は、①ソ連軍の撤退が現実的な課題となったこと、②ソ連側の態度に変化が起こり、中国国府軍の東北接収に協力の姿勢を見せ始めたこと、③この背景にはソ連のこの地域における日系産業資産撤収の目途が立ったことがあったこと、④そして大きなことは、同時期に米国政府内部でも変化が起きていたことなどであった。米国政府中枢部がとった基本方向は、ソ連の影響力を中国から排除するため、米軍支援下で国府軍を満州へ移送し、あわせて在満日本人を送還すること、要するに当初の「深入りを避ける」方針から「満州への関与を深め始める」という方向に転換したのである。これらの結果として、12 月中旬以降に日本人の満州からの引揚開始にいたる実行政策が進行し、それまで日本人の送還に関する GHQ/SCAP の権限が南朝鮮等に限定されていた段階から、東アジア全域の送還計画の中核を担うことに変化した。それが制度的に確定したのは、1946 年 1 月 15～17 日の東京での「引揚に関する会議」においてであったという。GHQ/SCAP が日本政府に「引揚げに関する基本指令」を出したのは、3 月 16 日であった。

引揚実現はアメリカにとっては「戦後アジア政策のなかに位置づけられていた」のであり、さらに大きくは、「海外残留日本人の引揚は、さまざまな国際関係が絡み合った問題であって、決して日本国内だけの問題でも、日米二国間だけの問題でもない。また、第二次世界大戦終結から冷戦勃発までの米ソの

共存と対立が並列する過渡期に起きた問題であって、米国のソ連や中国共産党への対応は、冷戦期の対立の視点からだけで読み解けるものでもない」というのである。

それにもかかわらず、「満州」でのソ連軍侵攻とその「軍紀」の「悪さ」から生じ在満日本人の被害と「悲劇」とが、その後に顕在化した「冷戦構造」の中での日本国民の反ソ・反共的「気分」とが結びついて「記憶」の「語り」が形作られていったことを確認しておかねばならないことを著者は指摘しておきたかったのであろう。私にはそう理解された。

日ソ戦争も引揚問題も、この時期の世界政治の動向全体を視野に入れる必要があるという。そう言われても、年老いた私は答えを見つけ出す仕事にもうくたびれている。

それにもかかわらず、山本有造編『「満州」記憶と歴史』(京都大学学術出版会、2007)は、従来の文書中心の「歴史記述では見えなかった、あるいは見ようとしなかった側面に光を当て、新しい眼で歴史を見直そう」として、特に中心課題を海外からの「引揚」の「記憶の歴史化」を歴史学と社会学分野との共同研究で試みている。ここでは、「満州」の体験者の「記憶」は、地域(都市部と農村部)、職業、年齢等々によってきわめて多様であること、日本人と現地住民との「記憶」の落差と多様さ等々を改めて浮き彫りにする成果を示してくれている。しかし「記憶の歴史化」が何を意味しているのかは私には読み取りにくかったので、ここでは言及することを避ける。ただ、この本の中の西村成雄論文「戦後中国東北における政治的正統性の源泉―『東北抗日聯軍』の記憶から『北満根拠地』へ」の「戦後中国東北政治空間における新たな正統性をめぐる二つの対抗の構図が明確化」してくる「前夜にあたる 1946 年後半の4ヶ月間の『休戦』期間こそ」1946 年 10 月頃までに佳木斯・依蘭・方正等々からの日本人移民団を「遣送」する条件を提供したという指摘は、先に紹介した加藤の指摘と共通するものとして確認できた。

さらに、私たちは自分たちの体験を問題にし続けてきたのだが、金賛汀『浮島丸 釜山港へ向かわず』(かもがわ出版、1994)は、日本に戦時動員されて青森から引き揚げる朝鮮人労働者たちが、1945 年 8 月 24 日、舞鶴港寄港で無残にも沈没した「浮島丸事件」の全貌と真相を日本人たちも関心を払い注目せよと私に迫る。君島和彦編『近代の日本と朝鮮-「された側」からの視座-』(東京堂出版、2014)も朝鮮・韓国との間での、戦時在日朝鮮人の帰還=引揚と逆に植民地朝鮮からの日本人の帰還が朝鮮・韓国に何をもたらしたかにも視野を広げろと呼びかけてくる。だが、私はもうこれ以上今回は触れる余裕がないので許してもらおう。

でも、これからかも私たちの体験を無にせず、語り継いでほしいと願って戦後世代の若い人びとにこれだけは最後に伝えておきたいと思うことがある。

**●この作品の伝えたいこと**

私はいま日本国憲法の前文を思い起こしている。

そこにはこう書かれている。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民

に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。」

この前文の基本精神から憲法第九條には、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」とこの憲法の「第二章戦争の放棄」の項を設けて謳っている。

私たちの体験を語り継いでくれるとき、ここから二つのことは是非とも学びとってほしい。

一つは、私たち満蒙開拓団の過去と体験の「国策」というものが持つ恐ろしさについてである。私たちの戦前時代、「満蒙開拓政策」が「国策」とされた時代には、私たちは主権者ではなかった。だから、私たち国民のほとんどは「国策」の「犠牲者」だったと躊躇いながらも言えなくはなかった。しかし、みなさんの時代は違う。現代日本では国民が主権者であり、政策の結果についても責任の一端を担わねばならない。「国策」の「犠牲者」だったという言い訳はできないのだということを胸に刻んでおいてほしい。もう一つ。これは希奇さんという中国人の画家がこの作品を制作してくれていることのもつ意味についてである。

再確認になるが、憲法前文は、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し」、「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と明言して、戦争放棄の第九条を掲げている。

希奇さんは、この作品を通じて、「恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚」している中国人の一人として、「平和を愛する諸国民の公正と信義」を示し、私たちの「信頼」に応え、「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会」の実現に向かって共に力を尽くしていこうと私たちに呼びかけ、勇気づけてくれているのだと私は思う。

とはいえ、まだ世界は現代のあらゆる先端技術を駆使して大国がその「国益」や「国策」を推し進めよ

うとする「覇権主義」が力を持っている。最近は特にそれが大きくなっているようにさえ見える。そのため、私たちも覇権主義的力を持たねば対抗できないし、軍事力を強化しないと国の安全は保てないぞという声が高まる様相を示している。しかし、国際社会が互いに軍事力の強化で国の安全を保とうなどとしては危険な迷路に迷い込むだけである。

それだけに「人類普遍の価値」を改めて再確認し、そのための学びを続け、「恒久平和」実現への優れた「創造力」を発揮してほしい。

私も、最終的な「正答」に達することは多分出来ないかも知れないと判りつつも、この作品の問いかけに応える仕事を生涯続けていくほかないと思っている。

（2022.8.15.脱稿）

【「一九四六」展実行委員会事務局長・宮原信哉】

# 私の「一九四六」への思い

宮原信哉

**A）なぜ王先生は「一九四六」を描いたのか**

王先生によると、まず 2010 年頃に引揚者の子供の写真を見た時、可哀想な日本人の子供だと思ったそうです。次に資料を読むにつれ、これは人種の違いや敵国の子供の問題ではなく、悲惨な状況に置かれた神聖な幼児（おさなご）たちに対する、人道への罪だと思う様になったとの事でした。更には、こんな悲惨な状況はたとえ敵国の人間に対しても、人類にとってあってはならないと感じ、その気持ちを絵画として表現したいと思う様になったそうでした。以前ある新聞社のインタビューで、王先生は「戦争ほど愚かな行為はない。あの戦争で日本人は加害者でありながら（女性や幼児や老人は）被害者でもある。日本人引揚げの史実を絵にして後世に伝え、平和の尊さを知って欲しかった。」と述べています。つまり王先生は中国・日本の国籍を越えて、換言するならばあたかも神様の立場で、この大作を構想 2 年と制作 3 年半で、計 5 年半も掛けて完成させたのでした。王先生は後半 3 年間は、まるで難民（引揚者）になった気持ちで筆を執られたと伺いました。

**B）ピカソの発言を踏まえ「一九四六」に描かれている「蛍」について**

特別サポーターの映画監督　山田洋次様にお会いした折、王希奇教授が敢えて「蛍」を使って、モノトーンの色調の中に明暗を表現している事を説明しました。私の拙い説明を大変熱心に聞いて頂きました。大作「一九四六」に描かれた、暗黒の画面に浮かび上がる無数の白くて小さな灯火は、自ら光を放つ「蛍」を表しています。王教授がこの「蛍」を通して表現したかった事は、人間が発する生きる喜びと希望と伺いました。敗戦による悲惨な難民生活を終え、日本帰還の喜びと期待を表現しているのです。また、日本国内においてお盆の頃まで生息する「蛍」は、淡い灯を放ちます。日本人の私は、絵画に描かれた点滅する蛍の淡い光に、寧ろ日本に帰る事ができなかった 50 万人近い残留日本人や、集団自決をした死者の無念さとその魂を感じざるを得ません。その意味ではこの大作は、極めて仏教的かつ宗教的な絵画と言えるのではないでしょうか？日本ではヘイケボタルやゲンジボタルのネーミングがあります。現在でも地域によっては、「蛍」と亡くなった人の魂を結びつける習俗は残っています。お盆の頃に点滅しながら淡い光を放って飛び回る「蛍」からは、死者の霊をイメージする事ができます。

ピカソは「絵は作者の欲求がそこに表そうとしたよりも、ずっと多くの事を表現する。作者はしばしば自分で予期しなかった結果に驚かされる。」と述べています。

王先生は、日本や日本人に償いを求めてはいません。しかし日中戦争の被害者でもある中国人の子孫である王先生が、加害者である日本人の子供たちが難民となった写真をご覧になって、被害と加害を齎す戦争の実相を大作として仕上げられた事に、一人の日本人として王先生への尊敬と感謝の念をお伝えしたいと思います。

東アジアの人々との尊厳ある和解に向けて、隣人への償いのあり方が日本や日本人に問われていると思わざるを得ません。私には「蛍」が象徴するのは希望だけでなく、日本に帰還出来なかった人々の無念さだと述べました。この様な感じ方は、王先生には全く思いも寄らない事ではないでしょうか？正にピカソが指摘している様に、画家が予期していなかった事に該当すると思います。

また、山田監督から頂いたメッセージは、神戸展ビラに記載しています。このメッセージを参考に、最終的に絵画展のタイトルを「戦争・平和・難民 ＆ 愛と償いの絵画展」としたのは、日本の戦後処理に対して日本及び日本人としての償いのあり方を、自問自答する必要があると認識しているからです。

私はこの大作を、日本人の心と魂を揺さぶる世紀の大傑作と評価しています。油絵と墨絵の合作による新しい画法を採用した事により、白黒写真で歴史を振り返る時の様な臨場感を感じさせてくれます。悲惨を極めた敗戦前後の歴史的真実が胸に迫ってきます。だからこそ戦争体験（加害者）二世として、未来永劫の日中友好と日中不再戦の思いを心に刻みたいと思います。

**C）描かれた海から連想すること**

葫蘆島港の海は、大作の画面の右奥に描かれています。黒い海は明治以降の日中間の暗黒の歴史を、その左横に描かれている光が差し込む海は、日中両国民の友好を象徴している様に思います。揺れ動く波は日中間に横たわった激動の歴史を物語っている様に思います。

海を介して文献で分かっているだけでも 2000 年以上に亘り、日本と中国は繋がり続けました。これからも大切な隣国として、神戸展のスローガンである「日中敬隣」の志を忘れてはなりません。海は日本と中国の歴史の生証人です。この海で再び紛争を起こしてはなりません。海を介して繋がり続けている日本と中国の友好も、未来永劫にわたり海と同じく繋がって欲しいと考えています。

**D） 絵画の焦点を複数化**

横 20 ㍍の大作なので、絵画の焦点が複数に置かれています。歩きながら鑑賞すると、あたかも自分が難民になった様な気分になるのはそのためです。

また、描かれている 500 人の邦人難民には明暗があります。引揚げた後の生活を象徴しているのではないでしょうか。帰還して大変な苦労を重ね、山林を開墾し農地として生活が安定した途端に、減反政策に翻弄されただけでなく、農地が放射能により汚染された福島県の満州引揚開拓農民の存在を忘れはならないと思いました。この事実は特別サポーターの早川篤雄住職から伺いました。

**E）構図の素晴らしさ**

絵画には 4 隻の巨大な船舶が描かれています。1 隻は日本の船舶と分かります。残りは米国の大型船舶ではないでしょうか？右奥の島の先端に停泊している大型船舶に乗り込もうとして、船のタラップを登る邦人難民を目にする事ができます。この階段こそ希望に繋がる「天国への階段」と、捉えることができるのではないでしょうか？

絵画の右奥では、島の先端で海へと続いており、安定した三角形の構図となっています。そしてその右の海は画面の広がりだけでなく、上記C)で述べた通り歴史の繋がりを連想させるあしらいが施されています。また、画面上部や右奥の海をあしらうことにより、奥行きの広がりを感じることができます。

手前の 2 隻の船舶へは乗り込みが終わり、これから出航するのでしょうか？

また、絵画の中心部には、王先生の心に刻まれた「遺骨を抱いた男装の少女」が描かれています。

尚、満州からの邦人引揚のために、米国が提供した LST 輸送船(戦車揚陸艦)は 85 隻、リバティ輸送船(戦時標準船)は 100 隻、病院船は 6 隻でした。

**大作「一九四六」関連写真(①～⑧)**

**A 写真集から「遺骨を抱いた男装の少女」が特定！私の思い**

上記写真④の「遺骨を抱いた男装の少女」を、王希奇教授は葫蘆島引揚の写真集から見つけました。その写真の男装の少女は「一九四六」では、写真⑤の絵画として描かれています。憔悴仕切った難民の中で、睨みつけるこの少年の怒りの表情は何を表すのでしょうか？愛する母親を失わせた戦争に対する憎しみは、望郷の思いよりどんなに強かったことでしょう。

私は「遺骨を抱いた男装の少女」の写真集を、2022 年 2 月に市立図書館で探し出しました。1970 年に毎日新聞社から刊行された「在外邦人引揚の記録」には、1946 年に葫蘆島から引揚げ、24 年経過した 1970 年当時の彼女の写真や、様々な個人情報が掲載されていました。写真⑥です。彼女のお名前は山本美津子様(1935 年生)で、当時は埼玉県在住でした。探し出して王先生にご紹介したいと考えています。

**B 米・中・日 友好の証として、今こそ「一九四六」を国連ビル大ホールなどで展示したい!!**

私はこの「遺骨を抱いた男装の少女」の写真④発見した時、改めてローマ教皇フランシスコが思いを寄せ世界に発信された、米国人写真家の故ジョー・オダネルの「焼き場に立つ少年」(写真⑦)を思い起こしました。

政治の世界で日中友好が後退する中、草の根の民間交流では王希奇教授との個人的交流を活かして、日中友好を推進したい所存です。また、私の夢は「米中日友好」や「人類運命共同体」「Love & Peace & Humanism」の証として、この大作「一九四六」を、ニューヨークの国際連合ビルやバチカン市(ローマ法皇庁)、更にはパリのユネスコ本部の大ホールに展示することです。

最後に聖句です。「平和を実現する人々は、幸いである」マタイによる福音書 5 章 9 節

聖書によれば「平和」は、ただ戦争がない状態だけではありません。より積極的に他者との間でお互いを尊重し、労わってより良く生きる事を目指すという意味を含んでいます。

私の夢は「蛍」の様に点滅する淡い光です。皆様のお力で大きな松明にさせて下さい。こんな時代だからこそ、自国中心・自分中心にならず、世界平和のために連帯しましょう。

Beyond50!! 日中国交正常化 50 周年記念 魯迅美術学院 王希奇教授『一九四六』神戸展 (1946 年旧満州(中国東北部)引揚絵図) ～『戦争・平和・難民 & 愛と償いの絵画展』～
実行委員会(代表:安斎育郎博士)　事務局長　宮原信哉

**ご寄付のお願い**

本展の開催には、搬送費や会場費など、約 300 万円近い費用がかかります。

大学院生以下を無料とし、一般の方々の入館料は 1000 円に抑えました。

神戸展成功のため、皆様のご支援をお願いいたします。

なお、ご寄付は、税制上の優遇措置の対象となりませんのでご留意下さい。

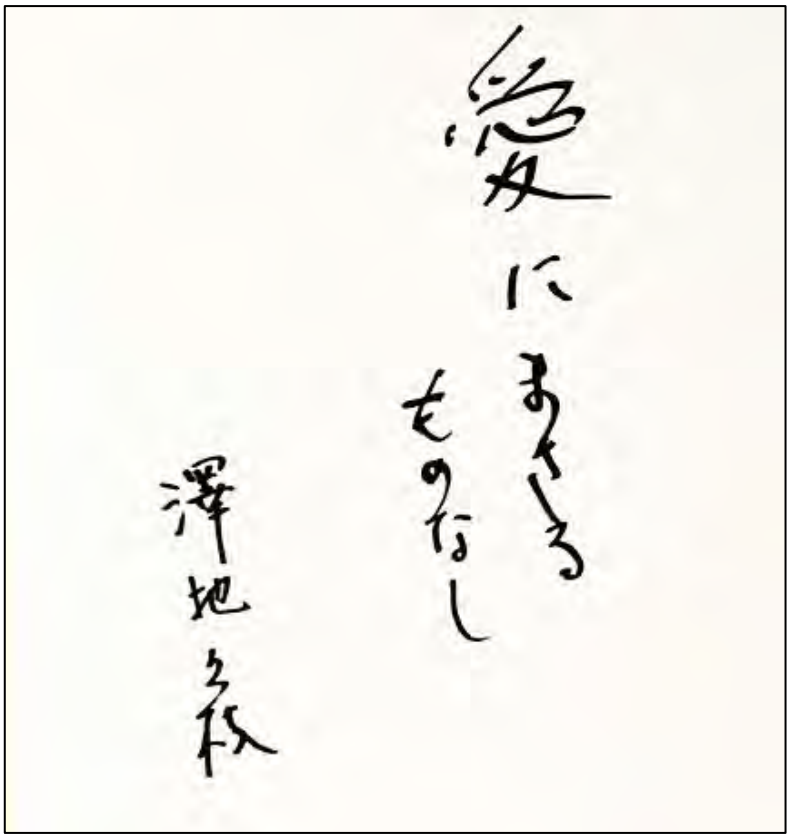
**寄付口座**

**名　　義　「一九四六」神戸展実行委員会**
**口座番号　池田泉州銀行 逆瀬川(サカセガワ)支店**
**普通口座 148583**

# 日中国交回復関係史〈略年表〉

※参考資料：http://rekishi-memo.net/gendaishi/japan_china_diplomacy.html

| 西暦 | 出来事 |
|---|---|
| 1949 年 | 中華人民共和国成立 |
| 1950 年 | 中ソ友好同盟相互援助条約調印 |
| 1952 年 | **台湾の国民政府と日華平和条約締結**<br>第 1 次日中民間貿易協定成立<br>以後、数次にわたって民間貿易協定を重ねるなど、「積み上げ方式」と呼ばれる漸次関係強化が進められた。 |
| 1955 年 | 日中輸出入組合設立 |
| 1958 年 | 長崎国旗事件<br>長崎の中国関連イベントで、右翼青年が中国国旗を引き下ろしたことに中国側が激怒。<br>背景には、台湾に好意を示す岸信介内閣に対する中国の警戒感があった。<br>中国が「政治三原則」を日本に提示<br>①中国敵視政策をやめる<br>②2 つの中国を作る陰謀に加わらない<br>③日中国交正常化を妨げない |
| 1960 年 | 日中貿易再開<br>中国が「貿易三原則（①政府間協定②民間契約③個別的な配慮）」を日本に提示して、民間貿易が再開された。 |
| 1962 年 | LT 貿易（日中準政府間貿易）開始。実質的な政府保証が付く準政府間貿易。 |
| 1966 年 | 文化大革命、中国国内の混乱で日中関係が停滞。<br>日本側も、佐藤栄作内閣が沖縄返還を優先としたため、関係進展はなかった。 |
| 1967 年 | 佐藤首相訪米：日米共同声明で中国の脅威に対処する為の日米協力を表明。 |
| 1971 年 | ニクソン訪中予定を発表 |
| 1972 年 | 田中角栄内閣成立<br>日中共同声明調印（国交正常化）<br>①両国間の不正常な状態を終わらせる<br>②日本は戦争責任を認め反省の態度を表明する<br>③日本は中華人民共和国を唯一の合法政府と認める<br>④中国は対日賠償請求を放棄する |




特別サポーター・澤地久枝さん

王希奇「一九四六」神戸展資料
発行：実行委員会事務局
2022 年 8 月 31 日
TEL : 09037146228
E-MAIL : smiyahara0405@gmail.com